様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３７４０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１６０９

研究課題名（和文）障害児者の地域移行を志向する施設訪問アドボカシーの開発

研究課題名（英文）Developing Residential Visiting Advocacy for the Transition of Disabled People to the Community

研究代表者
堀　正嗣（HORI, MASATSUGU）

熊本学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：６０３４１５８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,400,000円

研究成果の概要（和文）：　障害児施設研究班、障害者施設研究班、重症心身障害児者施設研究班の3つの研究班をに分かれて研究を行った。
　障害児施設班においては、アドボカシー支援により子どものエンパワメントが促進され、地域移行とその後の自立生活につながる可能性があることが事例検討により明らかになった。障害者施設班においては、入所者の限られた人間関係の中で、定期的に会いに来る個人と個人の繋がりから生まれている共事者としてどう在るのかが問われることが明らかになった。重症心身障害児者施設班においては、わからないことへの誠実さと共に、それを括弧に入れて前へ進むことと間柄的・関係論的人間観に立つことの重要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
入所施設における障害児者の権利擁護は「地域社会で生活する平等の権利」の実現を志向して行われなければならない。にもかかわらず、日本においては地域移行が進んでおらず、障害児施設を退所した子どもの多くが成人施設に移行することを余儀なくされている。
　このような状況の中で、地域移行を志向する施設訪問アドボカシーにより、障害児者のエンパワメントが促進され、地域移行とその後の自立生活につながる可能性があることが明らかになったことは社会的及び学術的な成果である。またこれまで未開拓であった、意思能力に大きな性格がある重症心身障害者への訪問アドボカシーをめぐる問題の所在を明らかにしたことも学術的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：The research was conducted in three research groups: the Research Group on Residential Visiting Advocacy with Disabled Children,with Disabled Adults and with Severely Mentally and Physically Impaired People.
　In the first group, case studies revealed that advocacy support promoted the empowerment of children and could lead to their transition to the community and subsequent independent living. In the second group, it became clear that, beyond advocacy as a idealtypus, the question of how to be a co-worker in the limited human relationships of the residents, which are born out of the connections between individuals who come to see each other on a regular basis, needs to be addressed. In the last group, the importance of honesty about not knowing, but also putting it in brackets and moving on and standing on an inter-personal and relational rather than an individualistic view of human beings became clear.

研究分野：障害学

キーワード：アドボカシー　権利擁護　障害児者福祉　地域移行　入所施設　自立生活　障害児施設　アクションリサーチ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2016 年 7 月に発生した相模原障害者殺傷事件は社会に大きな衝撃を与えた。また 2012 年 10 月に障害者虐待防止法が制定されたにもかかわらず、施設内虐待は後を絶たない。2017 年度の障害者福祉施設従事者等職員による障害者虐待の相談・通報件数は 2,374 件、認定件数（虐待判断件数）は 464 件であり過去最多を記録した（厚生労働省 2019）。相談・通報件数、認定件数ともに年々増加しており深刻な状況にある。施設内の権利擁護体制を整備することは喫緊の課題である。

障害児の権利については、障害者権利条約第 7 条 3 項で意見表明権の保障及びその際の「障害及び年齢に適した支援の提供」を規定している。しかし、障害児の意見表明権を保障するサービスは現状では存在せず、制度設計が求められている。また「障害児が虐待の被害者となる確率は障害のない子どもの５倍である」（国連子どもの権利委員会一般的意見９号）と指摘されている。さらに障害児施設では子どもの権利ノートが配布されていないこと、第三者評価受審が義務づけられていないことなど権利擁護システムが十全に機能していない状況がある。以上の点から、障害児入所施設における権利擁護体制の整備も喫緊の課題である。

入所施設における障害児者の権利擁護は「地域社会で生活する平等の権利」（障害者権利条約第 19 条）の実現を志向して行われなければならない。にもかかわらず、日本においては地域移行が進んでいない。第５期障害福祉計画の地域移行の数値目標が９％であり、その達成に向けた方策を提示することが課題である。また障害児施設を退所した子どもの多くが成人施設に移行することを余儀なくされている現状を改善することも急務である。

一方イギリスにおいては、判断能力に制約がある知的障害者・精神障害者・子どもを支援するためのアドボカシーサービスが制度化され、施設や病院への訪問アドボカシーも広く実践されている。これらのアドボカシー実践は、施設内における権利擁護や環境改善、ケアの質の向上、地域移行の促進に成果を上げている。

施設で生活する障害児者の状況を変革するには、イギリスをモデルとした訪問アドボカシーを創設し、地域移行支援と連携した支援を行うことが必要であると応募者は認識している。

２．研究の目的

長期に渡って施設生活を余儀なくされてきた障害児者の中には、管理された生活と社会的ネットワークからの隔絶、情報や経験の欠如、被虐待・権利侵害によるトラウマ等から、力を奪われ無為な生活を送っている人も少なくない（Goffman, Erving 1961;麦倉泰子 2019）。こうした人々は、自信や将来への希望を喪失し、意見表明や意思決定を行うことも困難になり、地域移行支援の不足とも相まって、施設入所の長期化や児童施設退所後も成人施設に移行する以外に選択肢のない状況に置かれている。

施設訪問アドボカシーと地域移行支援の連携による障害児者のエンパワメント支援の方法(権利意識覚醒、情報・経験・ロールモデル提供)、地域移行支援の方法（障害児の自立生活に向けた「自立生活支援計画」の策定支援、障害者の地域移行プログラム策定、自立生活プログラム等による障害児者の社会生活技能向上のための支援、障害児者の地域移行に向けた家族・施設・行政等へのアドボカシー支援の方法)、施設訪問アドボカシー提供体制の開発（施設訪問アドボケイト養成・認定方法、スーパービジョン方法、アドボケイト派遣団体・地域移行支援団体・施設・行政との連携方法）を行うことが本研究の主たる目的であった。

３．研究の方法

本研究では、障害児施設訪問アドボカシー研究班、障害者施設訪問アドボカシー研究班、重症心身障害児者施設訪問アドボカシー研究班の 3 つの研究班を組織し、独立アドボケイト派遣団体に所属するアドボケイト及び管理者（役員）と研究者が「定例研究会・事例検討会」等を通してミクロレベルのアクションリサーチを実施し、施設訪問アドボカシー実践の反省的分析により実践方法の評価と改良を重ねる。また施設入所者・アドボケイト・ピアサポーター（相談支援専門員）・施設職員・研究者による「地域移行連携研究会」を通してメゾレベルのアクションリサーチを実施し、アドボケイトと相談支援事業所、施設職員の連携体制を提示する。研究者や研究協力者によるすべての研究活動の記録や議事録、承諾が得られた活動場面の録音と撮影、活動において使用した資料をデータとする。

４．研究成果

障害児施設研究班、障害者施設研究班、重症心身障害児者施設研究班の 3 つの研究班をに分かれて研究を行った。障害児施設研究班、障害者施設研究班ではアクションリサーチを行った。重症心身障害児者施設研究班では、文献研究とインタビュー調査、参与観察を行った。

障害児施設班においては、アドボカシー支援により子どものエンパワメントが促進され、地域移行とその後の自立生活につながる可能性があることが事例検討により明らかになった。障害者施設班においては、理念型としてのアドボカシーや地域移行を越えて、入所者の限られた人間

関係の中で、定期的に会いに来る個人と個人の繋がりから生まれている共事者としてどう在るのかが問われることが明らかになった。重症心身障害児者施設班においては、開かれたわからなさ（わからないことへの誠実さと共に、それを括弧に入れて前へ進むこと）と個人主義的人間観ではなく間柄的・関係論的人間観に立つことの重要性が明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 堀正嗣	４．巻 171
２．論文標題 「分ける教育」はどのように生まれ、そしてどこへ進んでいくのか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福祉労働	６．最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 堀正嗣	４．巻 113（2）
２．論文標題 子どものメンタルヘルスと「子どもアドボカシー」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 都市問題	６．最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 堀正嗣	４．巻 145
２．論文標題 子どもの権利条約１２条と子どもアドボカシー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 News Letter（チャイルドライン支援センター）	６．最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 栄留里美	４．巻 1
２．論文標題 子ども福祉におけるアドボカシー～子ども参画を創り出す力に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 子どもアドボカシー研究	６．最初と最後の頁 7-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 栄留里美	4．巻 90
2．論文標題 子どもの人権と命を守るアドボカシーとは	5．発行年 2022年
3．雑誌名 自治体情報誌 D-file Beacon Authority	6．最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 栄留里美	4．巻 811
2．論文標題 子どもの声を聴き、反映する取り組み	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育と医学	6．最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀正嗣	4．巻 88
2．論文標題 子どもアドボカシーとは	5．発行年 2020年
3．雑誌名 世界の児童と母性	6．最初と最後の頁 7～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 栄留里美	4．巻 88
2．論文標題 施設訪問アドボカシーの取り組みについて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 世界の児童と母性	6．最初と最後の頁 23～27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀正嗣	4．巻 113
2．論文標題 子どものメンタルヘルスと「子どもアドボカシー」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 都市問題	6．最初と最後の頁 28～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥村仁美、栄留里美、内山洋子、鳥海直美	4．巻 －
2．論文標題 子どもの小さな声を大きくして届けるマイクのような活動～子どもアドボカシー（上）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 朝日新聞DIGITAL　論座	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥村仁美、栄留里美、内山洋子、鳥海直美	4．巻 －
2．論文標題 子どもの小さな声を大きくして届けるマイクのような活動～子どもアドボカシー（下）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 朝日新聞DIGITAL　論座	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Jane Dalrymple,座長：栄留里美、コメンテーター堀正嗣・渡辺睦美
2．発表標題 子ども・若者を守るための傾聴文化の創造~英国の子どもアドボカシーから学ぶ
3．学会等名 日本子ども虐待防止学会（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 栄留里美、安孫子健輔、　福井充、奥村仁美、佃あかさ、川瀬信一、茂木健司
２．発表標題 社会的養護における子どもアドボカシーのデザイン ～先行自治体の実践に学ぶ
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 栄留里美
２．発表標題 子ども福祉におけるアドボカシー
３．学会等名 子どもアドボカシー学会 全国大会（関西大学）（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計12件

１．著者名 栄留　里美、鳥海　直美、堀　正嗣、吉池　毅志	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 312
３．書名 施設訪問アドボカシーの理論と実践	

１．著者名 栄留 里美、鳥海 直美、堀 正嗣、吉池 毅志	４．発行年 2021年
２．出版社 解放出版社	５．総ページ数 144
３．書名 アドボカシーってなに？	

1．著者名 堀 正嗣	4．発行年 2022年
2．出版社 解放出版社	5．総ページ数 272
3．書名 「共に生きる教育」宣言	

1．著者名 井上 寿美、佐藤 哲也、堀 正嗣、大川 織雅、辻木 慎吾、疋田 美和、見元 由紀子、木村 勇基	4．発行年 2021年
2．出版社 解放出版社	5．総ページ数 160
3．書名 「10の姿」をこえる保育実践のために	

1．著者名 栄留　里美、長瀬　正子、永野　咲	4．発行年 2021年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 144
3．書名 子どもアドボカシーと当事者参画のモヤモヤとこれから	

1．著者名 佐藤 貴宣、栗田 季佳	4．発行年 2023年
2．出版社 ちとせプレス	5．総ページ数 384
3．書名 障害理解のリフレクション	

１．著者名 堀 正嗣	４．発行年 2020年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 64
３．書名 子どもの心の声を聴く	

１．著者名 堀　正嗣	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 224
３．書名 子どもアドボケイト養成講座	

１．著者名 堀正嗣	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 264
３．書名 障害学は共生社会をつくれるか	

１．著者名 栄留里美、鳥海直美、堀正嗣、吉池毅志	４．発行年 2021年
２．出版社 解放出版社	５．総ページ数 144
３．書名 アドボカシーってなに？	

１．著者名 井上寿美、佐藤哲也、堀正嗣、大川織雅、辻木慎吾、疋田美和、見元由紀子、木村勇基	４．発行年 2021年
２．出版社 解放出版社	５．総ページ数 160
３．書名 「10の姿」をこえる保育実践のために	

１．著者名 栄留里美、鳥海直美、堀正嗣、吉池毅志	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 312
３．書名 施設訪問アドボカシーの理論と実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鳥海　直美 (Toriumi Naomi) (00388688)	四天王寺大学・人文社会学部・教授 (34420)	
研究分担者	吉池　毅志 (Yoshiike Takashi) (60351706)	大阪人間科学大学・人間科学部・准教授 (34435)	
研究分担者	栄留　里美 (Eidome Satomi) (60708949)	大分大学・福祉健康科学部・講師 (17501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	栗田　季佳 (Kurita Tokika) (90727942)	三重大学・教育学部・准教授 (14101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関